

氏 名	村田 泰子	所属
		京都大学医学部人間健康科学科 非常勤講師
研究テーマ	イギリスにおける親密圏と公共圏の再編成についての調査研究 A Sociological Research on the Transformation of the Intimate and the Public	
【派遣先大学・研究機関・研究科名】 マンチェスター大学・モルガンセンター（関係性及び個人生活研究所） （Morgan Center for the Study of Relationships and Personal Life, The University of Manchester）		
【派遣先都市・国名】 ロンドン、マンチェスター、サルフォード・連合王国 （London, Manchester and Salford, United Kingdom）		
【派遣期間】 2008 年 12 月 22 日 ～ 2009 年 1 月 10 日		
【派遣先指導教員または受入研究者】 マンチェスター大学・モルガン・センター共同所長 キャロル・スマート教授		
【主要受講科目名および担当教員名】 1. 受講科目名 学部講義・家族生活と親密性の社会学（Sociology of Family Life & Intimacy） 担当教員名 キャロル・スマート教授（Professor Carol Smart） 2. 受講科目名 大学院演習（Postgraduate Seminar） 担当教員名 キャロル・スマート教授（Professor Carol Smart）		
【エラスムス派遣の研究上の成果について】 わたしは 2007 年 1 月から 2009 年 1 月まで、英国北西部のマンチェスター市に滞在し、イギリスにおける親密圏と公共圏の再編成を主題とする調査研究を行ってきました。上記研究期間のうち、2008 年 4 月から 2009 年 1 月までは、マンチェスター大学・モルガン・センター（関係性及び個人生活研究所）共同所長のキャロル・スマート教授が担当する大学院ゼミと学部講義を聴講し、イギリスにおける家族と個人生活の変容について学びました。また、2008 年 10 月以降は、同センターにテンポラリー・ビジター（客員研究員）として在籍し、他の研究者と交流を深めました。研究の終盤に当たる 2008 年 12 月から 1 月にかけては、京都大学グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」のアジア版エラスムス次世代研究者の助成を受け、ロンドンの大英図書館において、調査結果の取りまとめのために必要な資料・文献の収集を行いました。 今回の調査の中心的な課題は、階級的・民族的差異が大きいといわれるイギリスで、子育てにおける親密圏と公共圏の再編成がどのような差異をともなっていて進行しているのかを明らかにすることです。具体的に、乳幼児を育てる母親が多く利用する多様な保育サービス——地域の教会で開かれる「トドラーズ・グループ」（母子の集い）や「プレイ・グループ」（幼稚園）、「チャイルド・マインダー」（保育ママ）、民間の保育所など——の参与観察		

と、これらのサービスの利用者・提供者のインタビュー調査を行いました。一連の調査から、保育サービスの利用における二極化の現状が明らかになりました。端的に言えば、高学歴・高資格・高収入の母親ほど、政府や企業、地域が提供する制度やサービスを闊達に利用して、伝統的な親密圏の解体という事態にも柔軟に対処しています。たとえば、オクスフォード大学卒で、法学博士の資格をもち、企業弁護士として 10 年のキャリアをもつ 40 歳の母親 C (マンチェスター市ディズバリー在住) は、1 人目の娘を出産するまではフルタイムで働き、IT 技術者である夫の年収を上回る、年間 5~6 万ポンドの収入を得ていました。2 人の娘を出産後、それぞれ 1 年間の育児休暇 (法律で定められた権利、有給) を取ったのちは、仕事をパートタイムに切り替え、公的保育が利用できる年齢になるまで「チャイルド・マインダー」と呼ばれる保育ママを利用しています。チャイルド・マインダーに支払う金額は月に 400~500 ポンドに上りますが、それでも EU 一高いといわれる民間の保育所を利用するよりは安いといえます。

興味深いのは、イギリス・ミドルクラスの家族の伝統的な 2 つの親密圏である、〈親族〉と〈母性〉について表現するのに、C が用いたつぎのような語彙です。C には、15 マイル離れたところに住む 60 代の実母がおり、週に 1 回の頻度で会っているが、実母との付き合いを「義務にたくない」という考えと、実母本人の意向もあって、実母を平日の昼間の保育要員として当てにすることはないといいます。また、C の現在の年収は 2 万ポンドですが、今後、経済的な合理性を考え、夫がパートタイムで働き、C がフルタイムで働くことも考えているそうです。2 人の娘には、将来、「誰かに何かを供給 (provide for) してもらう側ではなく、供給する側になってもらいたい」とも語ってくれました。このように、高学歴・高資格・高所得の母親が、しばしば育児に協力的な夫の協力を得て、伝統的な親密圏の解体に対処しているのに対し、低所得者層の母親は、多くの場合、保育士やチャイルド・マインダーとして、そう多くない賃金と代償に他人の子どもを預かるか、または専業主婦として自分の子どもを育てています。問題は、やはり、後者の母親に選択肢がないことで、保育サービスの利用のみならず、(イギリス人にとって非常に重要な) 居住地や住居、学校、ライフスタイル、ひいては子どもの将来の職業の選択においても、選択肢が与えられていない現状が明らかになりました。

イギリスでは、長年、こうした問題は個々の家庭の問題とされてきましたが、90 年代後半以降、新労働党政権の下、「social and economic deprivation (社会的・経済的に奪われた状態にあること)」という新しい指標を用いて、子育てのために必要な資源のより公正な再配分を行う努力がなされています。そうした取り組みについて理解を深めるため、わたしは、マンチェスター市に隣接するサルフォード市で、2008 年 9 月から 2009 年 1 月にかけて Sure Start の母乳教室の調査を行いました。サルフォード市サルフォードは、全英第 15 位の「deprived」な地域に認定されており、母子保健の分野でも、10 代の妊娠や妊娠中の喫煙の多さ、生活保護を受ける母親の多さ、母乳育児の実施率の低さなど多くの問題を抱えています (先ほどの C が居住するディズバリーでは、産後 87% の母親が母乳育児を試みているの

に対し、サルフォードでは 60%しか試みていません)。週 1 回開かれる母乳教室では、地元助産師とピア・サポーターが中心となって、情報交換や物品の貸与、軽食の提供、そして何より、参加しやすい雰囲気づくりのための努力がなされていました。サルフォードは、人種的・民族的多様性が少ない地域ですが、英語を話さない外国人の母親の参加もみられました。そうした取り組みは、国家と地域が連携して、階級的・地域的・民族的差異に留意しつつ、親密圏と公共圏の再編成をすすめる取り組みとして評価することができます。

